山形県埋蔵文化財センター調査報告書第60集

東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係

予備調査報告書(1)

1998

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

東北中央自動車道相馬（そうま）・尾花沢（おばなざわ）線関係

予　備　調　査　報　告　書（1）

平成１０年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、東北中央自動車道相馬・尾花沢線にかかる予備調査の成果を概報としてまとめたものです。

高速道路は、上山市南部から東根市の北部まで、山形平野の中央部を縦貫するように建設されます。予備調査は、天童市の西部の田園地帯に所在する蔵増押切遺跡外7遺跡と、山形市の南西部の丘陵地帯に位置するオサヤズ窯跡の9遺跡につきまして予備調査を行ったものです。

この度の調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設事業に伴い、今後の建設事業計画と緊急発掘調査計画などの、調整に資することを目的に実施したものです。調査では、天童地区の遺跡で古墳時代から鎌倉・室町時代にかけての住居跡や建物跡などが多数発見され、数百年におよぶ人々の生活の跡がみとめられました。特に、蔵増押切遺跡では、集落跡とともに古代から中世にかけての水田跡が発見されたことは特筆されます。また、山形地区のオサヤズ窯跡では、瓦を焼きあげた窯跡が数基確認され、古代出羽国の解明の一つとなる成果が得られました。詳しいことにつきましては、平成10年度以降の本発掘調査に期するところが大きいと考えられます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴って事業区域内で発掘調査を必要とされる遺跡も増加の傾向にあります。これからの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私どもの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係者の方々に心から感謝申しあげます。

平成10年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、平成９年度の東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設事業に係る影沢北遺跡外の予備調査報告書である。

2　調査は、日本道路公団東北支社の委託を受け、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	蔵増押切遺跡外８遺跡（影沢北遺跡は未買収のため平成10年度予備調査実施予定）
所　在　地	山形県天童市大字高擂字松葉・影沢北外
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査期間	平成９年４月１日～平成10年３月31日
現地調査	平成９年９月16日～平成９年12月12日（調査日数56日）
調査担当者	調査第一課長　佐藤　庄一
	主任調査研究員　佐藤　正俊（現場主任）
	調査研究員　鈴木　良仁
	嘱託職員　須賀井明子
	嘱託職員　長瀬えみ子
	嘱託職員　齋藤　健洋
整理担当者	主任調査研究員　佐藤　正俊
	調査研究員　鈴木　良仁
	嘱託職員　須賀井明子
	嘱託職員　長瀬えみ子
	嘱託職員　齋藤　健洋
調査指導	山形県教育庁文化財課
調査協力	日本道路公団東北支社　日本道路公団東北支社山形工事事務所
	山形県土木部高速道路整備推進室　天童市建設部建設課
	天童市教育委員会社会教育課　山形市教育委員会文化課
	天童土地改良区　三郷堰土地改良区

4　蔵増押切遺跡の発掘調査にあたっては、山形大学教授阿子島功・仙台市地底の森ミュージアム斎野裕彦・岩手県立博物館日下和寿・仙台市教育委員会荒井格・古環境研究所松田隆二の各氏からご教示いただいた。ここに記して感謝申しあげる。

5　本書の作成にあたっては、挿図・図版等の作成が鈴木良仁・須賀井明子・長瀬えみ子・齋藤健洋が、執筆は佐藤正俊がそれぞれ分担し担当した。編集は丸山晶子・森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6　出土遺物・調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

目　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過と方法 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 7
　《天童地区》
　1　砂子田遺跡 …… 7
　2　中袋遺跡 …… 10
　3　阿部塚遺跡 …… 13
　4　蔵増押切遺跡 …… 14
　5　板橋１遺跡 …… 23
　6　板橋２遺跡 …… 26
　7　的場遺跡 …… 29
　《山形南地区》
　8　オサヤズ窯跡 …… 32
Ⅳ　調査のまとめ …… 36

表・挿　図

表－１　予備・発掘調査作業工程表 …… 2
表－２　平成９年度予備調査結果一覧 …… 35

第１図　山形南地区遺跡位置図 …… 4
第２図　山形北地区遺跡位置図 …… 5
第３図　天童地区遺跡位置図 …… 6
第４図　砂子田遺跡調査概要図 …… 8
第５図　中袋遺跡調査概要図 …… 11
第６図　阿部塚遺跡調査概要図 …… 13
第７図　蔵増押切遺跡調査概要図 …… 15
第８図　蔵増押切遺跡遺構概要図 …… 17
第９図　板橋１遺跡調査概要図 …… 24
第10図　板橋２遺跡調査概要図 …… 27
第11図　的場遺跡調査概要図 …… 30
第12図　オサヤズ窯跡調査概要図 …… 33

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

東北中央自動車道相馬・尾花沢線の建設事業計画は、平成２年度に県土木事業の上山～東根間都市計画道路整備事業として計画され、その後国幹審より高速道路整備路線計画として、平成５年度には施行命令が発令され、平成８年度から本格的に事業が開始されたものである。

この間、山形県教育委員会では山形県土木部等の関係機関と協議を図りながら、平成２年度から遺跡詳細分布調査を実施して、上山～東根間には周知の遺跡が22箇所と、遺跡の形状や地形からみた遺跡可能性地16箇所の合わせて38箇所を確認した。平成７年度には建設路線が決定されたため、さらに遺跡の所在等を確認した結果、周知の遺跡17箇所と遺跡可能性地16箇所の33箇所が路線内に位置していることが明らかになりました。

これに基づいて、埋蔵文化財の取扱いについて山形県教育委員会と事業主体である日本道路公団と協議を行った結果、建設工事の着手前の２カ年にわたって予備調査を実施して、その後の本発掘調査を計画的に進めることで協議が図られ、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて、平成９年度から予備調査を実施したものである。

予備調査は、山形県教育委員会が実施する遺跡詳細分布調査によって記録保存が確定した遺跡および遺跡の範囲について、緊急発掘調査の一環としてトレンチ等によって行う調査である。この調査によって次年度以降の発掘調査に必要な経費積算、調査期間の算定等の基礎となる資料を収集し、全体の事業量を掌握し長期間の発掘調査の効率化と、全体計画の調整を図ることを目的としている。

今年度の調査では、天童地区の砂子田遺跡・中袋遺跡・阿部塚遺跡・蔵増押切遺跡・板橋１遺跡・板橋２遺跡・的場遺跡で、山形南地区でオサヤズ窯跡の８遺跡を実施した。なお、天童地区の影沢北遺跡は、今年度未買収のため平成10年度に予備調査を行う予定である。

2　調査の経過と方法

調査は、平成９年９月16日から蔵増押切遺跡から調査を開始して、オサヤズ窯跡の調査が終了する平成９年12月12日まで、調査日数56日間にわたって調査を実施した。（表－１）

なお、蔵増押切遺跡については、隣接する倉津川の橋梁工事が今年度から始まるため日本道路公団と協議を行い工事に係る2,300㎡について緊急発掘調査を実施したもので、調査は９月20日から12月１日まで28日間行い、この間予備調査と緊急発掘調査との２班体制で並行して実施したものである。

調査の方法は、高速道路用地内に限定して行い、各遺跡毎のセンター杭を基準に、２×20ｍを基本の単位として、東西トレンチを20ｍおきに配置し、重機械で20～30ｍの厚さで表土層を除去し、面整理作業によって遺構や遺物の所在を確認する。その後トレンチ毎に確認した遺構の土層観察と記述、平面実測およびセンター杭を標高点とするレベル測定、写真撮影等の記録作業を実施した。

表－1　予備・発掘調査作業工程表

(月)		9月			10月					11月				12月		
(週)		16～19	24～26	29～3	6～9	13～17	20～24	27～31	4～7	10～14	17～21	25～28	1～5	8～12	
調査区	影沢北遺跡														未買収のため10年度予備調査実施予定
	砂子田遺跡														9月30日～10月29日(6日間)
	中袋遺跡														9月29日～10月29日(3日間)
	阿部塚遺跡														9月26日～10月30日(5日間)
	蔵増押切遺跡														9月17日～11月26日(21日間)
	《緊急発掘調査》														10月20日～12月1日(29日間)
	板橋1遺跡														9月24日～10月22日(8日間)
	板橋2遺跡														10月21日～11月11日(8日間)
	的場遺跡														10月22日～11月19日(11日間)
	〈山形南地区〉														
	オサヤズ窯跡														12月2日～12月12日(9日間)
内容	クイ打作業														(各トレンチ設定・緊急調査グリッド設定)
	表土除去(重機械)														(各トレンチ・グリッド拡張重機械使用)
	面整理・遺構確認作業														(各トレンチ遺構確認)
	遺構精査検出作業														(緊急調査遺構掘方等)
	記録														(各トレンチ等平面実測・レベル測定外)
	その他														(器材搬入・撤収・草刈作業・排水作業等)

Ⅱ　遺跡の立地と環境

高速道路は、上山市の南部から東根市の北部まで、山形盆地の平野部のほぼ中央を縦断するように建設される。この山形盆地は、山形県のほぼ中央の東寄りに在り、県内を縦貫する最上川の中流域にある。東部は、脊梁山地である奥羽山脈、西部は出羽丘陵によって画されている。

天童市は、山形盆地のほぼ中央に位置し、東は奥羽山脈、南は立谷川、北は乱川、西は最上川によって限られている。立谷川と乱川は、それぞれの源を東方の奥羽山脈に発し、西方の最上川に流れ込んで、この二つの河川は立谷川扇状地と乱川扇状地を形成している。立谷川扇状地は、南を山形市と接する高瀬川のつくる扇状地との合成扇状地であり、北半部が天童市にあたる。乱川扇状地は、東根市を流れる白水川、村山野川と押切川によって形成された複合扇状地であり、半径約11ｍにおよぶ大規模な扇状地で、南半部が天童市に入っている。二つの扇状地の先端部には豊富な湧水地帯が点在し、この地域に今回予備調査を実施した砂子田遺跡・中袋遺跡・阿部塚遺跡・蔵増押切遺跡・板橋１遺跡・板橋２遺跡・的場遺跡が立地し、標高90～95ｍを測る。

また、この地域は、西の最上川と接し、立谷川扇状地と乱川扇状地に囲まれ、天童市の西部域の平野では三角形を成す天童低地と呼ばれる最上川によって形成された後背湿地が大きく広がっている。稲作や果樹などの耕作が盛んで、その中に各集落が点在し田園地帯をかたちづくっている。

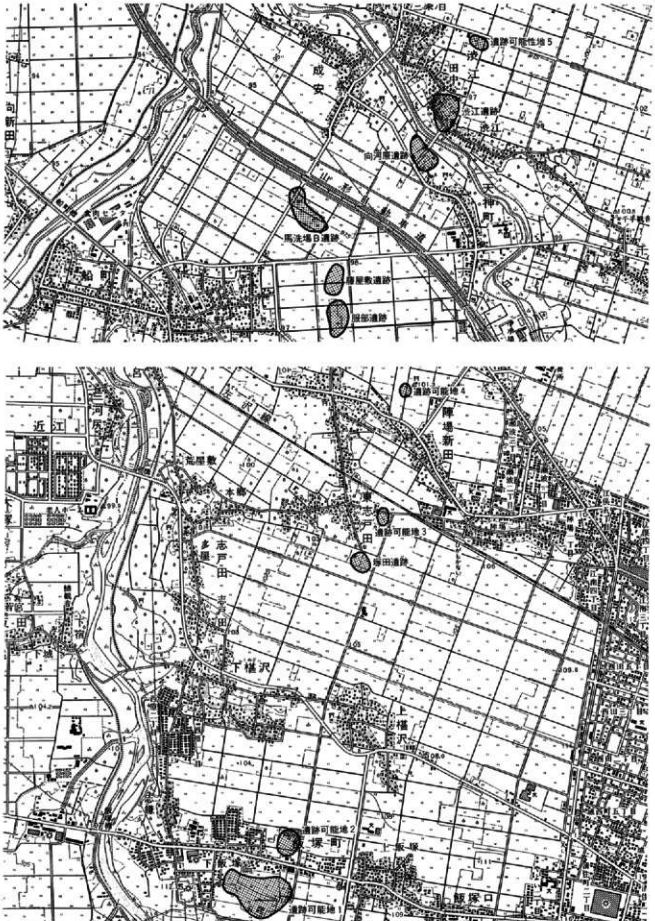
この地域の土壌は、黒色泥炭状の土壌が主体となり、一帯は広範囲におよび水田耕作の土地利用がはかられている。各遺跡の地層は、シルトあるいは粘土の土質によって形成され、遺構が構築される地山層となっているが大半がグライ化し、その基盤は礫および砂層から成りたっている。

天童市の遺跡は、奥羽山脈から広がる山麓部と平野の境界域では縄文時代早期からみられるが、二つの扇状地の扇央部から扇端部で縄文時代から弥生時代の遺跡がわずかに点在する程度で、古墳時代から中世にかけての時期の遺跡が多く分布している。中でも、蔵増押切遺跡の南西側約300ｍの地点に、昭和61年に県営ほ場整備事業に係る緊急発掘調査を実施し、その後国指定史跡となった西沼田遺跡が在る。この低湿地遺跡からは、多数の打込柱建物跡とともに大量の建築部材や木製品等が検出されている。

山形市のオサヤズ窯跡は、山形市の南西部、出羽丘陵の南端の山腹とそれを境とする沖積地の微高地に立地し標高141ｍを測る。この地区は、遺跡の東側で小河川の氾濫原となり、基盤が礫層でその上部に砂層が地山層として確認される。窯跡が確認された丘陵部の基盤は、凝灰岩で地山層が凝灰岩の風化した礫とシルト粘土が混じる。

オサヤズ窯跡の周辺には、北東部に８世紀代の県指定史跡の谷柏古墳群が、平地には奈良・平安時代の遺跡が多く所在している。また、この地区は、戦国時代の天正年間に最上軍と伊達・上山連合軍が戦った柏木山古戦場として、また遺跡東側には山形市指定天然記念物の樹齢600年のエドヒガン桜が、遺跡名の語源となる御窯神山神社が所在する由緒ある土地である。

第1図　山形南地区遺跡位置図（S＝1：25,000）



第2図　山形北地区遺跡位置図（S＝1：25,000）

第3図　天童地区遺跡位置図（S＝1：25,000）

Ⅲ　調査の概要

《天 童 地 区》

1　砂子田遺跡（平成９年度登録遺跡）

- 所　在　地　　山形県天童市大字高�字砂子田（北緯38°20′03″・東経140°20′00″）
- 調査期日　　平成９年９月30日～10月29日（６日間）
- 対象面積　　16,800㎡　　・調査面積　870㎡
- 調査の概要

本遺跡は、天童市高�地区の西に所在し、沖積地の微高地に立地し標高95ｍを測る。地目が水田となっている。調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として28本設定し、重機械によって20～25ｃｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

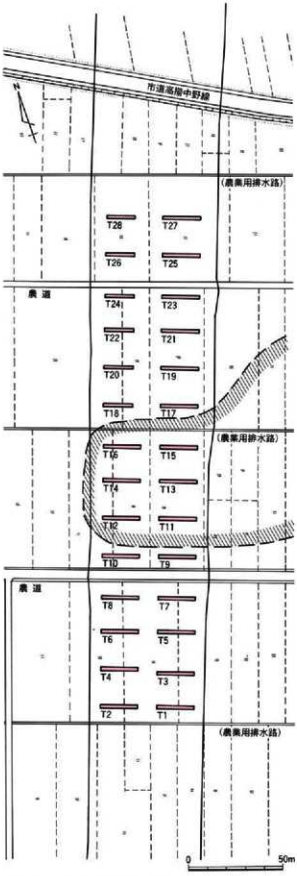
調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位まで削平されているため遺物包含層は検出されず、表土層を除去すると住居跡などが確認できる。

路線内の地形は、中央南側地区で遺構や遺物がＴ13～16を中心に集中し、その南・北側では多少の遺物が散在する程度で、自然堆積に伴って流れ込んだものとみられる。この地区は地山層（褐色シルト粘土）が安定し、周りの南・西・北地区では泥炭の黒色土層が約２ｍ以上堆積し、それぞれ地山層が急激に傾斜している。おそらく中央南側地区は、原地形が東側から張り出す微高地となっていると考えられる。なお、黒色土層からは遺構や遺物が確認されなかった。

遺構は、Ｔ６から縄文時代後期の不整円形になる径３ｍの竪穴住居跡１、径２ｍほどの円形を示す土坑３を確認する。いずれも覆土は、褐色シルト質粘土で多量の炭化粒子を含くんでいる。古墳時代は、Ｔ５から方形を示し一辺が約2.5ｍの竪穴住居跡１を確認する。暗褐色シルト質粘土で多量の炭化材が混入している。同じトレンチ内からは、奈良・平安時代の北辺の柱穴が直線上に３本並ぶ径30ｃｍ柱穴を、その外径15～20ｃｍの柱穴11・小溝跡２・径40ｃｍの土坑１を確認する。Ｔ３・４からも奈良・平安時代の土坑２・柱穴18が確認されている。奈良・平安時代の覆土は、黒味が強い色調で暗褐色シルト質粘土でシルトが増す土層である。その外に、路線内の東側付近で蛇行しながら南北に走る旧小河川跡が確認されているが、遺物が検出されないため時期は不明である。

遺物は、南側中央部の微高地に散在しているが、とくに遺構が確認された地区からはそれぞれの時代の遺物が集中して出土している。また、中央南側地区の西側の傾斜変換線付近では、縄文時代土器と奈良・平安時代の土器が混在しながら多量に出土している。出土した主な遺物は、縄文時代後期の土器や石器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・赤焼土器で、この外中世陶磁器片や近世の磁器片が出土し、整理箱に２箱になる。

路線内の遺跡範囲は、遺構や遺物が多く確認された中央南側地区の微高地、路線幅65ｍで南北の長さ60ｍの範囲で面積が3,900㎡で、当初推定した範囲より縮小したものである。平成10年度以降に緊急発掘調査が必要となる。



第４図　砂子田遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

砂子田遺跡全景（南西から）

砂子田遺跡全景（南から）

Ｔ３調査状況（東から）

Ｔ４調査状況（西から）

T５調査状況（東から）

T12調査状況（東から）

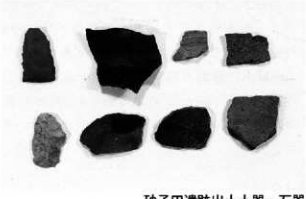
T13調査状況（東から）

T14調査状況（東から）

T16溝跡・土坑（東から）

T22調査状況（西から）

T25調査状況（西から）



砂子田遺跡出土土器・石器

2　中袋遺跡（平成２年度登録遺跡）

- 所　在　地　　山形県天童市大字高擶字中袋（北緯38°20′16″・東経140°20′10″）
- 調査期日　　平成９年９月29日～10月29日（３日間）
- 対象面積　　9,600㎡　　・調査面積　680㎡
- 調査の概要

本遺跡は、天童市高擶地区の北東に所在し、沖積地の微高地に立地し標高94ｍを測る。地目が水田となっている。調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として17本設定し、重機械によって24～26ｃｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位まで削平されているため遺物包含層は検出されず、表土層を除去すると住居跡などが確認できる。

路線内の地形は、Ｔ１～５にかけて地表下２～３ｍで青灰色粘土層に達し、その中間堆積層が黒色で植物質有機物を多量に含む泥炭湿地層となっているが、遺構や遺物は確認されなかった。また、Ｔ６～17にかけては、表土下で褐色シルト質粘土の地山層に達しＴ１～５に比べて原地形が一段と高くなり北側でまた低地となる微高地を形成している。

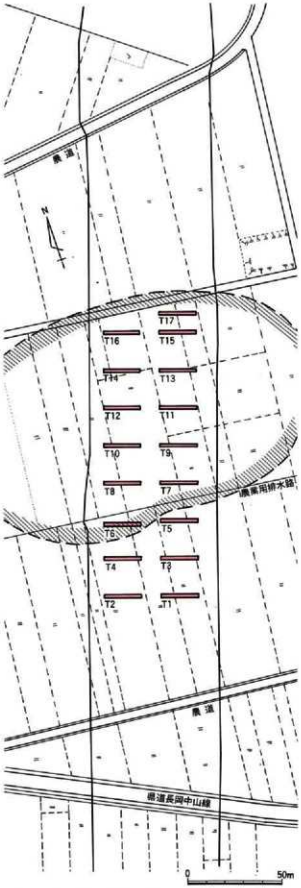
遺構は、微高地平坦部のＴ７・９～15にかけて竪穴住居跡・建物跡・柱穴等が確認されている。竪穴住居跡は、Ｔ13～15で一辺３～５ｍの方形を呈する竪穴住居跡19確認され、Ｔ13・14で１～３棟重複している。住居跡覆土は、全体に暗褐色のシルト質粘土で多量の炭化粒子や粘土粒が混じるが、Ｔ13で確認されている住居跡覆土では色調が黒色になりより炭化粒子が多くなる土質である。建物跡２は、Ｔ13と15それぞれ１棟認められ南辺の柱構成が３間となっている。覆土は、いずれもグライ化し青灰色のシルト質粘土に炭化粒子が含まれる。

柱穴は、Ｔ７・９・10・12・15で多く確認されている。また、Ｔ13・15では土坑７がみとめられ、径55～60ｃｍで黒色のシルト質粘土に炭化粒子や粘土ブロックが含まれている。とくにＴ７～10にかけての柱穴は大半がグライ化している。柱穴の総数は107である。

溝跡は、小溝跡が幅15～20ｃｍのものがＴ12・15でほぼ東西に走り、幅65～90ｃｍの溝がやや南北に走るものがＴ13～15にかけて続いている。Ｔ９では溝跡が幅約１ｍで直線５～６ｍになるコ字状になる遺構が確認されている。

遺物は、Ｔ６～17にかけての微高地の平坦部に多く散在し、とくに竪穴住居跡が確認された覆土からまとまって出土し、Ｔ14の西端で確認された溝跡からも多く出土する。遺物の主な時代は、奈良・平安時代の土師器や須恵器の坏等の破片が多く、赤焼土器破片もみられる。その外中世陶磁器破片や近世磁器破片もわずかながら出土している。遺物は、整理箱に２箱出土している。

路線内の遺跡の範囲は、遺構や遺物が多く確認された中央の南地区から北側農道にかけて、路線幅（東西）65ｍで南北の長さ約125ｍの範囲で、路線内面積が8,100㎡である。当初推定していた範囲より南側が縮小したものである。平成10年度以降に緊急発掘調査が必要となるものである。



第５図　中袋遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

中袋遺跡全景（南西から）

中袋遺跡全景（南から）

Ｔ３調査状況（西から）

Ｔ７土坑・溝跡（西から）

T８溝跡・柱穴（西から）

T９調査状況（東から）

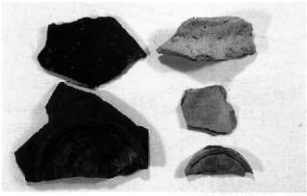
T10溝跡・柱穴（西から）

T12竪穴住居跡・溝跡・土坑（西から）

T13竪穴住居跡・溝跡・土坑（西から）

T14竪穴住居跡・柱穴・溝跡（西から）

T16竪穴住居跡・柱穴・溝跡（西から）



中袋遺跡出土土器

3　阿部塚遺跡〈平成９年度登録遺跡〉

- 所　在　地　　山形県天童市大字高擶字阿部塚（北緯38°20′57″・東経140°20′03″）
- 調査期日　　平成９年９月26日～10月30日（５日間）
- 対象面積　　9,000㎡　　・調査面積　500㎡
- 調査の概要

本遺跡は、天童市塚野目地区の北東に所在し、沖積地の微高地に立地し標高97ｍを測る。地目が水田となっている。

調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として13本設定し、重機械によって24～29ｃｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

なお、東側のＴ13については、重機械が入れないために人手によって表土層を削除しながら調査を進めた。

調査の結果、路線内全域にわたって、昭和50年代の県営ほ場整備事業の際の重機械の跡がみられ、とくに西側の地区では表土下50～70ｃｍの深さに達するまで削り取られていると考えられる。遺構は、各トレンチがこのような状態であるため検出されなかった。

遺物は、Ｔ５内の表土下24ｃｍで縄文時代中期末葉の深鉢形の土器が重機械に押しつぶされた状態でまとまって出土している外は、各トレンチ内から奈良・平安時代の土師器や須恵器の坏等の破片、中世陶磁器の破片が出土している。出土した箱数は整理箱に１箱である。

なお、この地区から東へ約250ｍいった地点で、昭和50年代の県営ほ場整備事業の用排水溝を設置する際に、深さ30ｃｍほどで奈良・平安時代の土師器の坏やカメが出土している。おそらく遺跡の中心地が東に所在していると考えられる。

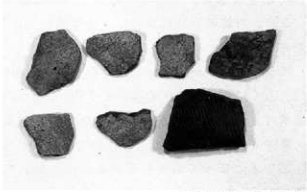
路線内は、昭和50年代の県営ほ場整備事業の際、全体に削平されかすかに遺物が出土するのみで、遺跡の範囲は不明確である。このような状況を考慮すると路線東側から延びる遺跡の一部として考えられるが、平成10年度以降の緊急発掘調査の対象からは除外されるものである。

第６図　阿部塚遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

阿部塚遺跡全景（南から）

阿部塚遺跡全景（南東から）

T７調査状況（西から）



阿部塚遺跡出土土器

4　蔵増押切遺跡〈平成９年度登録遺跡〉

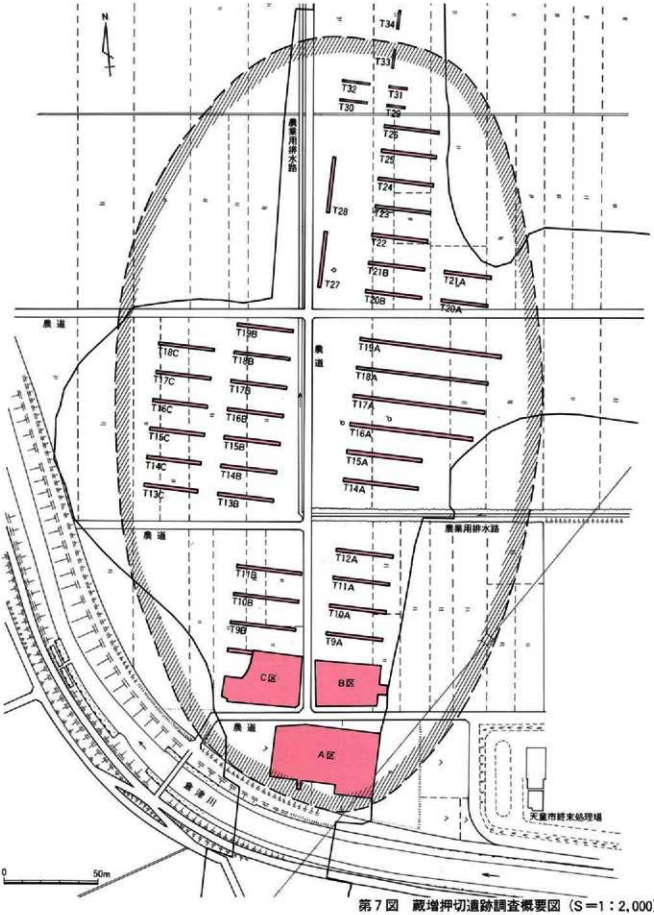
- 所　在　地　　山形県天童市大字蔵増字押切（北緯38°21′40″・東経140°20′55″）
- 調査期日　　平成９年９月18日～12月１日（47日間）
  予備調査９月18日～11月26日（21日間）
  発掘調査10月21日～12月１日（29日間）
- 対象面積　50,000㎡　　・予備調査面積　4,170㎡　　・発掘調査面積　2,300㎡
- 調査の概要

本遺跡は、天童市蔵増区の南東の倉津川をはさんで所在し、沖積地の微高地および自然堤防上に立地し標高90ｍを測り、地目が水田・畑地となっている。倉津川をはさんで本遺跡の南西約300ｍの地点に古墳時代の低湿地遺跡で、多数の打込柱建物跡とともに大量の建築部材や木製品が検出された国指定史跡西沼田遺跡がある。

(1)　予備調査

予備調査は、高速道路建設予定地のインターチェンジを対象に１×10・１×20・２×30・２×60～70ｍトレンチを基本の単位として51本設定し、重機械によって19～30cm表土層（水田耕作土）を除去した後、面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

なお、遺跡の北側の範囲を再度確定するため、調査期間の後半に主要地方道天童・大江線付近で１×10・１×20ｍトレンチを人手によって表土層を削除しながら調査を進めた。



第７図　蔵増押切遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

予備調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位まで削平されているため遺物包含層は検出されず、表土層を除去すると住居跡などの遺構を確認できる。

路線内の地形は、遺跡のほぼ中央部を縦断する農道の東側のＴ９Ａ～19Ａにかけて平坦で原地形が高く、その北側・西側・南側になると緩やかに傾斜し、南側のＡ区になると倉津川の自然堤防上に立地するため微高地となる。また、北側のＴ24以北およびＴ13Ｃ～18Ｃの西端からまた平坦となる。なお、Ｔ９Ａ～19Ａにかけての微高地はおそらく路線外の東側から続いてくるとみられる。各時代にわたっての集落もこのような原地形を利用しながら、住居跡や建物跡などを構成している。

遺構は、古墳時代では遺跡の南側寄りの農道東からＴ19Ａ～12Ａにかけてと Ｂ区の東側に分布し、Ｔ９Ａ・11Ａ・12Ａで大きさ約４～６ｍの方形を呈する竪穴住居跡や土坑・小溝跡などが確認されている。覆土は、いずれも褐色・暗褐色のシルト質粘土に多量の炭化粒子を含んでおり、一部住居には焼土が混じっている。

奈良・平安時代の遺構は、遺跡の南側寄りで古墳時代と重複しているが、横断する２本の農道と排水路に囲まれた地区と、Ｔ８Ｂ～11Ｂにかけて偏在している。竪穴住居跡はＴ14Ａ～19Ａのトレンチ中央東寄りから西端にかけて位置し、大きさ約５～６ｍで方形を示しカマド跡も確認されている。

また、縦断する農道西側の地区には、竪穴住居跡は余りみられず建物跡を構成する柱穴や土坑・小溝跡などが在り、Ｔ14Ａ～19Ａのトレンチ中央部から東端にかけても同様な結果が得られている。いずれの覆土も、黒褐色・暗褐色のシルト質粘土に炭化粒子や粘土ブロックなどが含まれているが、Ｔ14Ａ～19Ａにかては色調がグライ化し青灰色となっている。

中世になると、遺跡全体にわたって柱穴などが確認されているが、横断する北側農道Ｔ20・20Ｂ・27の以北に建物跡を構成する柱穴や小溝跡などが集中している。また、Ｂ区の中央南寄りからＡ区にかけても集中し偏在している。特に、Ａ区の東寄りから西側の地区（緊急発掘調査区を除く）では、掘立柱建物跡１（東西２間×南北３間）や小掘立柱建物跡が数十棟が重複してみられる。

その外、粘土ブロックや焼土ブロックを多量に含む土坑が８基、井戸跡２基も確認され、おそらくこの地区は鍛治工房に関する生産場所と考えられる。覆土は、いずれも褐色・黄灰色のシルト質粘土で炭化粒子が混じっているが、Ｔ20・20Ｂ・27の以北ではグライ化し青灰色・黄青灰色の色調となっている。

確認された遺構の数は、古墳時代の竪穴住居跡３・土坑１・溝跡２、奈良平安時代で竪穴住居跡25・掘立柱建物跡２・土坑３・溝跡13・柱穴45・畦畔跡、中世では掘立柱建物跡15・溝跡21・柱穴226・畦畔跡などである。その外時期は不明であるが旧河川３が確認されている。

遺物は、遺構の分布する範囲と同様な広がりを示しており、その大半が竪穴住居跡からの出土で、主なものは土師器・須恵器・赤焼土器・珠洲系陶器・青磁などである。出土した数は緊急発掘調査も含めて整理箱に19箱出土している。

第８図　蔵増押切遺跡遺構概要図（S＝1：300）

蔵増押切遺跡全景（南西から）

T10B竪穴住居跡・川跡・溝跡（西から）

T11B川跡・溝跡（西から）

T11A竪穴住居跡・柱穴・溝跡（西から）

T13B竪穴住居跡・川跡・溝跡（東から）

T15A柱穴・溝跡（西から）

T16A竪穴住居跡・溝跡（西から）

A区作業状況（東から）

(2) 発掘調査

緊急発掘調査は、隣接する倉津川の橋梁工事が平成９年度から始まるため、Ａ区東側のＸ軸グリッド20・21の幅20ｍとＢ・ＣのＳＤ５（溝跡）以南の、工事に係る面積2,300㎡について予備調査と並行して緊急発掘調査を実施したものである。

調査は、予備調査の段階からＡ・Ｂ・Ｃ区の３区、重機械によって拡張し、１単位を10ｍとするグリッド設定後、面整理作業を実施した。その結果、旧河川跡（ＳＧ１）や古墳時代の溝跡１（ＳＤ２）・奈良・平安時代の掘立柱建物跡（ＳＢ10）など、主に中世村落の一部区域であることが確認された。なお、グリッドＹ軸方向はＮ－20°－Ｗを測る。

〈Ａ区〉

調査区の北側では、掘立柱建物跡２棟が検出され、ＳＢ８は南北に長軸をもつ桁行３間×梁行２間で西側に庇が付随し、ＳＢ９は東西に長軸を有する桁行３間×梁行２間で両者いずれも近接して位置し、柱穴はやや方形を示し大きさ25～35ｃｍ・深さ20～30ｃｍである。その周辺部には、大きさ約１～３ｍ・深さ15～20ｃｍで不整形を呈する不明の落ち込みが検出され、さらに溝跡が２本平行にほぼ東西方向に走り幅10～20ｃｍ・深さ６～10ｃｍとなるが性格は不明である。溝跡ＳＤ34は、幅30～40ｃｍ・深さ５～15ｃｍでほぼ南北方向に走りＢ区まで続き、ＳＤ４・５よりも旧く古墳時代の溝跡である。その外、大きさ10ｃｍ前後・深さ５～８ｃｍの柱穴が散在しているが構成などは不明である。

中央から南側にかけては、ＳＤ11がほぼ長軸を南北にとり、方形の区画になるように水田跡を巡っている。ＳＤ11は、幅２～３ｍ・深さ50～80ｃｍで断面が薬研堀状になり、底面には多数の小ピットが認められ、北側で２条平行に走り、溝の中から珠洲系陶器片が出土している。

水田跡は土層断面で観察され、その後南東側で畦畔跡として確認される。畦畔は、暗褐色ないし黒褐色のシルト粘土と黄褐色粘土を混ぜ合わせてつくられ、一部水口も検出される。北側では、明確にとらえられず底面の酸化したマンガンとして確認される。水田耕作土は、黒褐色・暗褐色のシルト質粘土で酸化が著しい。ＳＤ11は、恐らく水田跡に付属する用排水路と考えられる。ＳＤ34を除くと、この地区一帯は出土した土器から13～14世紀の所産と推定される。

〈Ｂ・Ｃ区〉

調査区の北側で、東側から西側にかけて緩やかに蛇行する旧河川跡ＳＧ１が在り、Ｂ区の中央でＳＧ１からはじまる溝跡ＳＤ５がＣ区まで続いている。ＳＧ１は、上部の土層観察のためのみ調査を行い規模などは不明であるが、Ｃ区の道路際の土層観察では深さ３ｍ以上と考えられる。堆積土は黒色の腐植土が互層に薄く流入しているものの砂層が充満し、時期は特定されていないが出土した遺物から中世以前と推定される。ＳＧ１とＳＤ５の間には、畦畔跡を伴って水田跡が検出され一部水口も確認され、耕作土は暗褐色のシルト質粘土で酸化が著しく、奈良・平安時代の土師器片のみが出土し、ＳＧ１との重複関係からみて古代の水田跡と考えられる。

奈良・平安時代の遺構は、ＳＢ10では桁行３間×梁行２間の建物跡で奈良・平安時代の倉庫跡で、柱穴は径20～35ｃｍで黒褐色で多量の炭化粒子を含んでいるが、一部グライ化した色調となっている。ＳＤ14は、ＳＧ１に直行するようにほぼ南北に走り、幅２～３ｍ・深さ20～40ｃｍで上部や壁体さらに底面に多数の小ピットがある。溝跡の覆土は、黒褐色で粘土質シルトに粘土粒子

やブロックが混じっている。性格などは、不明であるが出土した土器から奈良・平安時代の時期である。

古墳時代の遺構は、土坑SK213が不整の円形を呈し大きさ約3mで深さ20～25cmを測り、土坑の内部から古墳時代の土師器の破片が多量に出土している。覆土は、暗褐色のシルト質粘土に粘土ブロックが多量に含まれるが性格などは不明である。SD2は、幅35～40cmで深さ25～35cmをはかり、検出面の上部から坏・高坏・ツボ・カメがほ場整備の際削り取られているが、出土した状態から判断して、溝跡の中層に並べて置いたと考えられる。覆土は、上部が暗褐色で下部が黄灰色になり、いずれも粘土質シルトで多量の粘土ブロックが含まれている。C区の西側は、ほ場整備事業によって削平されており、遺構や遺物が検出されなかった。

本遺跡は、倉津川によって形成された自然堤防やそれにともなう微高地に立地し、古墳時代、奈良・平安時代、中世へと続く大規模な集落跡で、集落と水田が近接して発見されたことは特筆される。

路線内の遺跡の範囲は、当初推定していた範囲と異なり、遺跡の南端域が約50m南へ北側で約40mそれぞれ延びたものである。路線内に係る面積は、53,200㎡であるが今回の発掘調査で2,300㎡を調査したため、平成10年度以降の調査面積は50,900㎡分が緊急発掘調査の対象となる。

A区完掘状況（南から）

A区SB8完掘状況（南から）

A区SB9完掘状況（南から）

A区SD11検出状況（南西から）

A区水田跡（南から）

B区遺構確認状況（北から）

B区完掘状況（北から）

SD11検出状況（東から）

水田跡・SG 1 検出状況（東から）

B区作業状況（東から）

C区SG 1 土層断面（北西から）

蔵増押切遺跡出土土器

5　板橋１遺跡〈平成９年度登録遺跡〉

・所　在　地　　山形県天童市大字蔵増字板橋（北緯38°22′17″・東経140°21′02″）

・調査期日　　平成９年９月24日～10月22日（８日間）

・対象面積　　10,800㎡　　・調査面積　1,180㎡

・調査の概要

本遺跡は、天童市蔵増地区の倉津川をはさんで北東に所在し北側で板橋２遺跡と隣接し、沖積地の微高地に立地し標高91ｍを測る。地目は、水田となっている。調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として19本設定、重機械によって15～27ｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、トレンチ内の面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

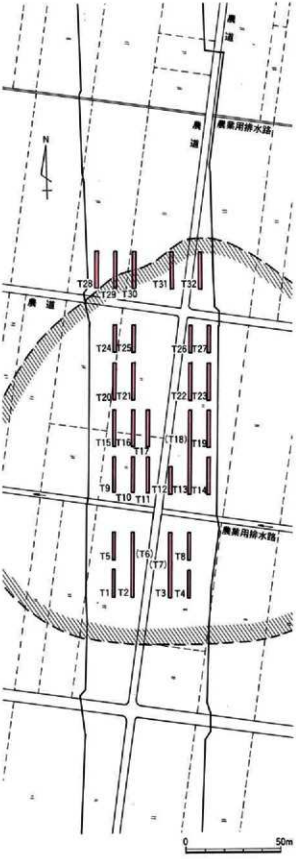
調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位にかけて削平されているために遺物包含層は検出されず、表土層を除去すると住居跡などが確認できる。特に、遺跡の南端部では顕著に約34～42ｃｍ削平されている。

路線内の地形は、遺跡を縦断する西側のＴ15～17・Ｔ25までが平坦で原地形が高く、その南側や東側で緩やかな傾斜地となり、Ｔ１～８にかけて急な傾斜地になり地山層も深くなっていく。地山層は褐色ないし黄褐色シルト質粘土で、北側で砂層が混じり、南側にいくにしたがって土色がグライ化して青灰色に変わる。

遺構の分布する範囲は、大きく縄文時代と奈良・平安・鎌倉時代の二つに分けることができる。縄文時代の遺構は、遺跡の中央平坦地から南側にかけての緩傾斜地に竪穴住居跡や土坑が広く偏在し、特にＴ５～11にかけて集中している。竪穴住居跡６棟は、平面形が楕円ないし不整円形を示し大きさが約３～４ｍ、褐色あるいは暗褐色のシルト質粘土で炭化粒子や粘土塊などが多量に含まれいる。土坑は、大きさが１～２ｍで円形を呈し、暗褐色シルト質粘土で炭化粒子などが混じる。古墳時代の遺構は、北東側のＴ26・27で幅約２～４の溝跡がほぼ東西に走るように確認され、覆土は黒褐色シルト質粘土で炭化粒子を多量に含む。溝跡の上面から土師器カメが一括に出土している。奈良・平安・鎌倉時代の遺構は、遺跡の北側から中央の平坦地（中央排水路付近）までの広範囲に分布している。奈良・平安時代の竪穴住居跡３棟は、平面形が方形を呈し、大きさが約４～５ｍになり、覆土が黒色シルト質粘土で多量の炭化材や粒子が含まれる。奈良・平安・鎌倉時代の柱穴は、おそらく建物を構成すると考えられ、黒色・黒褐色のシルト質粘土で炭化粒子を含んでいるが、南西側ではグライ化している。確認された遺構は、竪穴住居跡９・土坑110・溝跡13・柱穴367・川跡２である。

遺物は、遺構の分布する範囲と一致し、縄文時代後期の土器・石器、古墳時代土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・赤焼土器、中世の陶磁器片が出土し、整理箱にして１箱である。

路線内の遺跡範囲は、遺構や遺物が多く確認された地区で、当初推定していた範囲より南へ30ｍほど延びて、路線幅（東西）65ｍで南北の長さ約166ｍの範囲で、路線内面積が10,800㎡で、当初推定していた範囲より拡大したものである。平成10年度以降に緊急発掘調査が必要となる。



第９図　板橋１遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

板橋１遺跡全景（南西から）

Ｔ３竪穴住居跡・溝跡（南から）

Ｔ５竪穴住居跡（南から）

Ｔ９竪穴住居跡・土坑（南から）

T12建物跡・柱穴（南から）

T22土坑・柱穴（南から）

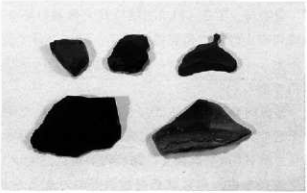
T25川跡（南から）

T26柱穴・溝跡（南から）

T27溝跡（南から）

T30柱穴・溝跡（南から）

T31柱穴・川跡（南から）



板橋１遺跡出土土器・石器

6　板橋２遺跡〈平成９年度登録遺跡〉

- 所　在　地　　山形県天童市大字蔵増字板橋（北緯38°22′24″・東経140°21′03″）
- 調査期日　　平成９年10月21日～11月11日（８日間）
- 対象面積　　8,400㎡　　・調査面積　840㎡
- 調査の概要

本遺跡は、天童市蔵増地区の倉津川をはさんで北東に所在し南側で板橋１遺跡と隣接し、沖積地の微高地に立地し標高91ｍを測る。地目は、水田となっている。調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として21本設定、重機械によって21～27ｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、トレンチ内の面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位にかけて削平されているために遺物包含層は検出されず、表土層を除去するとすぐに住居跡などが確認できる。特に、遺跡の南端部では顕著で約１ｍ削平されている。

路線内の原地形は、遺跡の南側（農道南側）では西から東にかけて低湿地状態が続き、地山がやや舌状になるように張り出し、微高地になる原地形となっており、北側にいくしたがって高くなり、Ｔ15・16以北で平坦となっていく。なお、南側の低地からは遺構は確認されないが、Ｔ６の西端から縄文時代晩期の粗製土器がまとまって出土している。

遺構は、南側農道を挟んで中央排水路付近まで古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡や建物跡を構成する柱穴さらに溝跡などが多く遍在している（Ｔ７～17）。また、中央排水路を挟んで北側地区までは中世の建物跡に伴う柱穴が多く確認されている（Ｔ16～20）。古墳時代の住居跡はＴ７・11・13で６棟確認され、覆土が暗褐灰色シルト質で多量の炭化材や粒子に混じって焼土ブロックが含まれており、いずれも重複して焼失家屋である。

奈良・平安時代の住居跡は、Ｔ９～13にかけて８棟認められいずれも重複し、黒褐色シルト質粘土で多量の炭化粒子や粘土ブロックが混じり、一部カマドも確認される。溝跡はＴ９・10・15でみられ、幅15～25ｍで東西・南北方向に走り、覆土が奈良・平安時代の住居跡に酷似している。

中世の柱穴の覆土は、褐色シルト質粘土に多量の炭化粒子を含み、特にＴ15・16で建物跡を構成すると考えられる柱穴群が確認されている。

遺物は、Ｔ７・11で古墳時代土師器の坏やカメが住居跡よりまとまって出土する。奈良・平安時代の土師器や須恵器がＴ７～18にかけて散布し、特にＴ７・11・13では住居跡や溝跡から多く出土している。中世の陶磁器片は、Ｔ16～21にかけて多く分布している。出土箱数は整理箱に１箱である。

路線内の遺跡範囲は、当初推定していた範囲とは異なり、南側でＴ３・４付近を南限として若干延び、北側では大幅に修正され市道付近まで遺跡の範囲となる。路線幅（東西）65ｍで南北の長さ約190ｍの範囲で、路線内面積17,500㎡で、当初推定していた範囲より増大したものである。平成10年度以降に緊急発掘調査の対象となる。

第10図　板橋２遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

板橋２遺跡全景（南から）

トレンチ面整理作業状況（南から）

Ｔ７竪穴住居跡（東から）

Ｔ８調査状況（東から）

T８溝跡（西から）

T10竪穴住居跡・溝跡（東から）

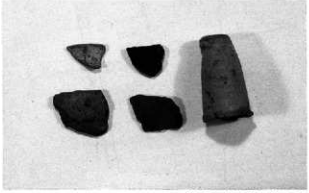
T11竪穴住居跡（東から）

T11出土土師器（南から）

T14溝跡（東から）

T20柱穴・溝跡（北から）

T21建物跡（南から）



板橋２遺跡出土土器

7　的場遺跡〈山形県遺跡番号295〉

・所　在　地　　山形県天童市大字成生字的場・水尻（北緯38°22′35″　・東経140°21′05″）

・調査期日　平成９年10月22日～11月19日（11日間）

・対象面積　18,000㎡　　・調査面積　1,360㎡

・調査の概要

本遺跡は、天童市成生地区の西に所在し南側で板橋２遺跡と隣接し、沖積地の微高地に立地し標高91ｍを測る。地目は、水田と果樹園になっている。調査は、高速道路建設予定地を対象に２×20ｍトレンチを基本の単位として48本設定し、重機械によって15～27ｃｍ表土層（水田耕作土）を除去した後、トレンチ内の面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

調査の結果、昭和50年代の県営ほ場整備事業によって遺構の上面から中位にかけて削平されているために遺物包含層は検出されず、表土層を除去するとすぐに住居跡などが確認できる。特に南西側Ｔ16・18・20・22・24・26付近では約35～40ｃｍほど著しく削平されている。

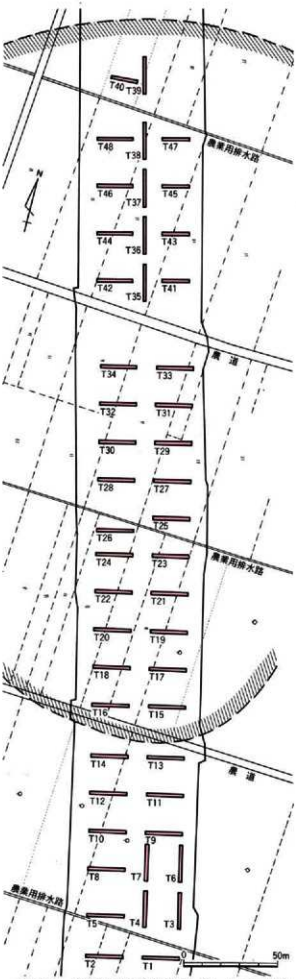
路線内の原地形は、遺跡の中央部から南寄りにかけての西側で南西方向へやや傾斜している外は、全体として平坦で安定した地形となっている。地山層は、黄褐色ないし褐色のシルト質粘土で、遺跡の南西および中央西が砂礫で、遺跡の中央から北側にかけて砂層となっている。

遺構は、遺跡南端から中央農道（Ｔ15～34）にかけて奈良・平安時代の竪穴住居跡62・建物跡６・土坑６・溝跡５・柱穴127・川跡１が確認されている。特に、Ｔ17・21～27・29・30では竪穴住居跡が密集して検出され、それぞれ重複している。建物跡はＴ28・29に集中してみられる。川跡はＴ16からＴ21にかけてほぼ南北に横走している。奈良・平安時代の遺構覆土は、暗褐色あるいは茶褐色のシルト質粘土に炭化粒子や粘土塊などが多量に含まれる。川跡は黒褐色の色調でやや泥炭質になっている。

中世の遺構は、遺跡中央部の農道を境としてその北側にかけて分布している。特にＴ37～47にかけては、建物跡を構成する柱穴やそれに付随する小溝跡、土坑やその他柱穴が密集している。中でもＴ25で１基確認された土坑には多量の焼土が含まれている。遺構覆土は、いずれも黄色灰色・暗褐色のシルト質粘土に多量の炭化粒子が混じるが、Ｔ43～48にかけて一部グライ化している。遺構の数は、建物跡３・土坑１・溝跡32・柱穴152である。

遺物は、遺構と同様な広がりがみられ、奈良・平安時代の土器の大半が竪穴住居跡から多く出土している（Ｔ17～30）。中世の遺物は、遺跡の全体に散在しているが中央農道から北側にかけて最も多く認められる。主な遺物は、土師器・須恵器・青磁などである。出土した数は、整理箱に２箱である。

路線内の遺跡範囲は、当初推定していた範囲と大きく異なり、北へ約135ｍ移動した地区で遺構や遺物が多く確認された。南端が南側農道で北端は北側の排水路付近までにあたる。路線幅（東西）約65ｍ南北の長さ約370ｍの範囲に遺構が分布し、路線内の面積は24,000㎡となる。当初推定していた範囲が大きく変更し、面積も増大している。平成10年度以降に緊急発掘調査の対象となる。



第11図　的場遺跡調査概要図（S＝1：2,000）

的場遺跡全景（東から）

トレンチ面整理作業状況（南から）

T８柱穴（東から）

T15柱穴・溝跡（西から）

T17竪穴住居跡・溝跡（西から）

T21竪穴住居跡（東から）

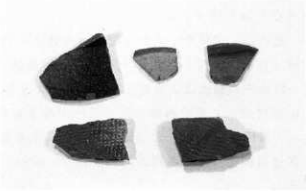
T24竪穴住居跡（西から）

T37柱穴・溝跡（南から）

T39土坑・溝跡（南から）

T45柱穴・土坑（西から）

T46柱穴・溝跡（東から）



的場遺跡出土土器

《山形南地区》

8　オサヤズ窯跡〈山形県遺跡番号67〉

- 所　在　地　　山形県山形市大字松原字山ノ神（北緯38°11′44″・東経140°18′03″）
- 調査期日　　平成9年12月2日～12月12日（9日間）
- 対象面積　　7,400㎡　　・調査面積　600㎡
- 調査の概要

本遺跡は、山形市松原地区の南西に所在し、沖積地の微高地上および丘陵山腹に立地し標高140mを測る。地目が、水田・畑地・果樹園・荒地などである。

調査は、高速道路建設予定地を対象に2×20・1×10・1×2mを基本の単位として47本設定し一部拡張を行った。本線地区では重機械を使用したが、丘陵部および付替道路地区では人力によって掘り下げた。表土層を除去した後、各トレンチ内の面整理作業を実施して遺構や遺物の所在を確認し、トレンチ毎に平面図などの記録を作成した。

調査の結果、高速道路の本線地区は、南東の台地上での坪掘り調査では表土下約18～26cmで地山層に達し、遺物包含層や遺構が確認されなかった。南の沖積地は、小河川の氾濫原で一面礫層に覆われており、遺構や遺物は検出されなかった。この2地区は、遺跡外と判断される。西側の丘陵山裾付近では、表土下約25～30cmで厚さ12～20cm、黒色の粘土質シルトに凝灰岩の風化礫が混じる遺物包含層がT9・18の一部で検出されているが、遺構は確認されていない。

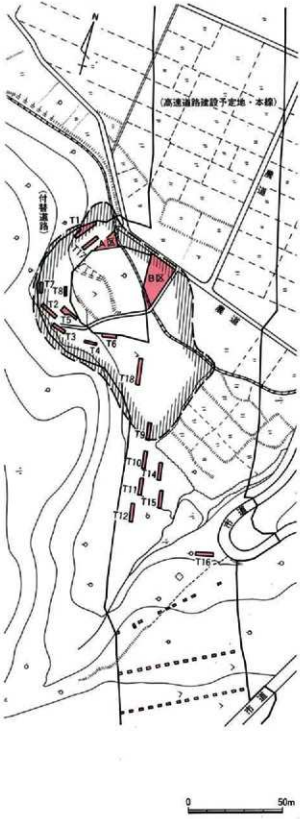
高速道路の本線地区での遺構は、重機械で拡張したB区で土坑5基が確認され、いずれも大きさが約3～5mの円形や不整円形を呈し、覆土が暗褐色の粘土質シルト層に多量の黒色・褐色・黄褐色などの粘土塊や凝灰岩風化粒が多量に混り、恐らく粘土を採集するための採掘坑と考えられる。B区での遺物の出土は、布目瓦片が多く出土している。

西側の丘陵山腹、付替道路地区の調査は、部分的な未買収地区を除きT1～6・17・18を人力によって表土除去を行った。表土下約25～45cmで、凝灰岩を基盤として褐色・黄褐色・黄灰色の色調となる凝灰岩礫混じりのシルト質粘土層となる。遺構は、T1の東側でほぼ東西方向に走る窯跡2基を確認した。窯跡は、灰原が東向きになり、上部が褐色の粘土と瓦片を混ぜて固めており、部分的に焼土も確認され、約3分の1は路線外に位置している。その外のトレンチからは遺構や遺物が確認されなかったが、T5・7からは黒色のシルト質粘土に炭化粒子を含む落ち込みが認められている。A区でも同様な黒色の落ち込みが南北方向に走っているがいずれも性格などは不明である。

遺物は、窯跡や土坑が確認された地区の外に、T9・18で奈良・平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。出土した数は整理箱に16箱で、その大半が瓦の破片である。

路線内の範囲は、当初推定した範囲よりも南側の地区が大幅に縮小し、沖積地の微高地（丘陵山裾付近）とその西側へ続く丘陵山腹までが遺跡の範囲である。

予備調査で得られた遺跡の範囲は、南北約70m・東西約110mで面積7,700㎡となるが、今回高速道路建設に係る路線内の面積は4,400㎡である。平成10年度以降の緊急発掘調査の対象となる。



第12図　オサヤズ窯跡調査概要図（S＝1：2,000）

オサヤズ窯跡遺跡全景（西から）

Ｔ１窯跡検出状況（東から）

Ｔ１窯跡検出状況（南から）

Ｔ１窯跡検出状況（西から）

T 2 調査状況（北から）

T 5 調査状況（北から）

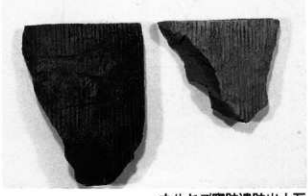
T17調査状況（西から）

T18調査状況（北から）

A区調査状況（西から）

B区完掘状況（南東から）

B区土層断面（北から）



オサヤズ窯跡遺跡出土瓦

表－2　平成９年度予備調査結果一覧

	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	調査面積	当初路線内面積	変更路線内面積	出土箱数	備考
〈天童地区〉									
1	影沢北遺跡	天童市大字高擶字影沢北外	散布地	古墳 奈良	0	(13,800)	(13,800)	0	《路線内未買収地のため平成10年度予備調査予定》
2	砂子田遺跡	天童市大字高擶字砂子田	集落跡	縄文(後期) 古墳・奈良 平安	870	16,800	3,900	2	
3	中袋遺跡	天童市大字高擶字中袋	集落跡	奈良 平安	680	9,600	8,100	2	
4	阿部塚遺跡	天童市大字高擶字阿部塚	散布地	縄文・奈良 平安・鎌倉 室町	500	9,000	0	1	《ほ場整備事業により削平され破壊》
5	蔵増押切遺跡	天童市大字蔵増字押切	集落跡 水田跡	古墳・奈良 平安・鎌倉 室町	6,470 (内緊急発掘調査2,300㎡)	50,000	50,900 (緊急発掘調査分を除く)	19	
6	板橋1遺跡	天童市大字蔵増字板橋	集落跡	縄文(後期) 古墳・奈良 平安・鎌倉 室町	1,180	10,800	12,300	1	
7	板橋2遺跡	天童市大字蔵増字板橋	集落跡	古墳・奈良 平安・鎌倉 室町	840	8,400	17,500	1	
8	的場遺跡	天童市大字成生字的場外	集落跡	奈良・平安 鎌倉・室町	1,360	18,000	24,000	2	
〈山形南地区〉									
9	オサヤズ窯跡	山形市大字松原字山ノ神外	窯跡	奈良・平安	600	7,400	4,400	10	
備考		(計)			12,500	130,000 (影沢北遺跡を除く)	121,100 (影沢北遺跡を除く)	38箱	

Ⅳ　調査のまとめ

今回の予備調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）建設事業の工事に先立って、緊急発掘調査の一環としてトレンチ調査を主体に実施したもので、次年度以降の発掘調査に必要な経費積算、調査期間の算定等の基礎的となる資料を収集するとともに、今後の事業計画等の調整に資するため実施したものである。調査は、天童地区で蔵増押切遺跡外７箇所と、山形南地区のオサヤズ窯跡の１箇所の８遺跡について実施した。なお、天童地区の影沢北遺跡は、平成９年度中の用地買収が未解決のため、平成10年度に予備調査を実施する予定である。また、蔵増押切遺跡については、隣接する倉津川の橋梁工事が今年度から始まるため、工事に係る地区の2,300㎡について予備調査と並行して緊急発掘調査を実施したものである。

1　砂子田遺跡－遺跡の範囲が当初より大部分縮小し、東から舌状に張出す中央南側地区の微高地に、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑等、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が確認され、集落跡と判明した。

2　中袋遺跡－遺跡の範囲が多少縮小、周辺地区よりやや高い平坦地に立地、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の主な遺構が中央部から北側にかけて多く確認され、奈良・平安時代の集落跡と判明した。

3　阿部塚遺跡－遺跡は、県営ほ場整備事業によって削平され破壊を受け遺構は確認されず、縄文時代の土器等が出土したのみである。

4　蔵増押切遺跡－古墳時代から奈良・平安時代の遺構は、遺跡の中央の微高地上にあたる東側に多く集中し、その周辺に古代の水田跡が存在するものとみられる。中世は、遺跡全体に広がりをみせ、倉津川の自然堤防上に工房跡や水田跡が集中するとみられる集落跡である。

5　板橋１遺跡－縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑が遺跡の南西側の緩傾斜地に、古墳時代の溝跡が北東よりに在り、奈良・平安時代の遺構は中央の微高地の平坦地に多くみられ、中世になると南側に柱穴や溝跡が集中する集落跡である。

6　板橋２遺跡－古墳時代の遺構は中央部の平坦地に分布し、竪穴住居跡は火災をうけたものが多い。奈良・平安時代になると南側から中央北寄りに竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が確認される。中世は中央から北側のやや高まった地区の平坦地に建物跡等が在る。

7　的場遺跡－奈良・平安時代の遺構は、遺跡の南側から中央部まで確認され、特に中央で竪穴住居跡が重複して密集し、その周辺には掘立柱建物跡が多く偏在している。中世は、中央北寄りから北側にかけて建物跡の柱穴や溝跡が散在する集落跡である。

8　オサヤズ窯跡－窯跡は西側の丘陵斜面に位置し、焚口部がいずれも東側を向きほぼ東西に長軸を有する登窯で、半地下式ないし地下式の構造をもつと思われる。東側の平坦地では粘土を採集したとみられる土坑が確認されている。

この結果をもとに、今後は日本道路公団や山形県教育委員会と調整を図りながら、山形県埋蔵文化財センターでは平成10年度以降に阿部塚遺跡を除く砂子田遺跡外６遺跡について緊急発掘調査を順次進め、併せて山形南地区と山形北地区の予備調査についても実施する予定である。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第60集

東北中央自動車道相馬（そうま）・尾花沢（おばなざわ）線関係
予　備　調　査　報　告　書 (1)

1998年3月31日　発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター

〒999－3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話　023－672－5301

印刷　㈱大風印刷